ISSN 2189-8731

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島嶼研だより

No.73　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2017 年 3 月

主な記事

地域研究コンソーシアム社会連携賞受賞（河合　渓）　p1
学生奮闘記「教員の卵が語る太平洋島嶼学特論」（窪田　建）　p3
フィールドこぼれ話「島と看護職」（兒玉慎平）　P15
連載　とうがらしに旅して　第十四回「花岡胡椒（一）」（山本宗立）　p16

地域研究コンソーシアム社会連携賞受賞

国際島嶼教育研究センター長　河合　渓

国際島嶼教育研究センターは第 6 回（2016 年度）地域研究コンソーシアム賞（JCAS 賞）・社会連携賞を受賞しました。地域研究コンソーシアムは、地域研究に携わる日本の研究・教育機関、学会、市民団体などによって構成される組織で、共同研究及び共同調査を通じて、国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的としています。地域研究コンソーシアム賞はこれらの目標を達成する上で大きく貢献した個人・団体に贈られるものです。その中の社会連携賞は狭義の学術研究以外の分野で賞の趣旨に合致する活動実績を対象とします。

今回の受賞タイトルは「鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの奄美群島における社会連携活動」です。その講評の中で「第一に、島嶼域という地域を島嶼学を通じて研究するのみならず、自治体、地域住民などとの多様な社会連携を包摂する活動であること、第二に、対象地域に研究拠点（奄美分室）を設け、その活動を支える体制を整え、地域のこどもたちにフィールドワークの楽しさとともに、地域の生物多様性を学ぶ場を形成していること、第三に、世界自然遺産登録に向けた地域研究者の取り組みとして、多くの出版物を含む様々な広報活動に取り組んでいること、などにおいて、高く評価できる。これらの点に鑑みて、同活動は、社会連携賞の授賞対象としてふさわしいものと判断される。」と、国際島嶼教育研究センターの活動を評価していただきました。

この講評にあるように、今回受賞の対象となった活動とは、奄美群島を含む薩南諸島を対象に行ってきた国際島嶼教育研究センターの活動だけではなく、現在まで行われてきた鹿児島大学の活動への評価でもあります。

鹿児島大学は地域に貢献する大学として、アジア太平洋島嶼域での教育・研究とその成果を地域に還元する活動を重視することを、第二・第三中期目標にしています。そして、奄美群島は生物と文化の多様性が非常に高い地域で、2 年後に世界自然遺産を目指している地域です。このような背景の中、平成 27 年度に奄美大島

に本センターの分室を設置しました。この奄美分室の施設は奄美市より提供していただいたものです。また、奄美群島の中の 12 の市町村が作る奄美群島広域事務組合と鹿児島大学は平成 26 年度に包括連携協定を結びました。これにより 2 つの組織が連携を取り、様々な活動を地域と協力して活動する体制を作りました。例えば、平成 27 年度（平成 31 年度まで）には文科省特別経費概算要求「薩南諸島における生物多様性の維持機構解明と拠点形成」が採択され、約 50 名の研究者が生物多様性の研究をするとともに、その成果を用いて地域貢献を行っています。この活動では、本センターを中心に、本学教員、地域の高校、教育委員会、地元の研究者などが協力し観察会や研究会なども行っており、これらの活動が本受賞で評価していただいた一つといえます。

私はセンター代表者としてこの賞を受賞いたしましたが、今回の受賞に関する活動には多くの方々に関与していただいています。鹿児島大学前田学長をはじめとする執行部の方々、文科省特別経費概算要求の代表者である鈴木英治教授をはじめ参加している約 50 名の本学研究者、約 70 名の本センターの兼務教員、現在まで奄美群島を対象に活動を行なってきた本学教員、そして奄美広域事務組合、奄美市、地域の方々の活動の総合した成果です。これらの方々に心からお礼を申し上げます。

また、今回の受賞の講評の最後には「奄美群島における社会連携活動を受賞対象とすることは、これまでの活動の成果に対する評価である以上に、地域研究者が、研究だけに留まらず、地域の自然環境とその自然に根ざした地域の人々の暮らしを真摯に見つめ、多様な地域のステークホルダーに積極的に寄り添おうとする本活動の試行錯誤への賛辞である」とあります。本センターとしては、今後も本賞に恥じないように、活動を行っていきたいと思います。

地域研究コンソーシアム社会連携賞盾

学生奮闘記

教員の卵が語る太平洋島嶼学特論

窪田　建（鹿児島大学教育学研究科）

私は、来年度から鹿児島で小学校の先生になります。本稿では「太平洋島嶼学特論」を通して、児童に伝えたいことや教育実践に活かしたいことを執筆します。

本特論で私たちはピス島に 2 泊 3 日過ごしました。電気・水道・ガスが無いという文明から離れたこの島での生活。児童はえーっ無理！！と言いそうですね。しかし、私はとても有意義な時間を過ごしました。それは人と繋がる楽しさを実感したからです。ピス島の人々は私たちを温かく迎えてくれました。言葉は分かりませんが、非常に楽しい時間を共有しました。その時は言語や人種、国籍の壁を感じず、皆が一体となっていました。またグアムでも Nereo 家の皆さんにはダンスパーティや BBQ で手厚く迎えて下さり、とても楽しいひと時を過ごしました。グアムに家族ができたことが何よりも嬉しいです。このすべてが一体となった、楽しい時間を作れる教員になりたい。そう強く思いました。

伝えたいことはまだあります。今から 70 年前、ミクロネシア連邦では鉄の雨が飛びかい、多くの日本人、アメリカ人、チューク人が命を落としました。恥ずかしながら、私はここが第 2 次世界大戦の舞台であったことをこの特論で知りました。ザビエル高校にあった壁画は戦争の悲惨さが描かれと平和へ祈りが託されていました。教員の私にできることはこの祈りを、次の世代を担う子供たちに託すことです。特に壁画に書かれたメッセージの真意を児童に考えさせたい。「IN MEMORY OF ALL THOSE WHO DIED DO」。

最後に、今回の特論を通して一番の宝は「出会い」です。ふと世界地図を目にしたときに、日本から遠く離れた島に、友達や家族がいるのだと思うと不思議な感覚になります。そして、この出会いをコーディネートしてくださったのが山本先生です。山本先生には感謝致します。と同時に、私も山本先生みたいに児童に素晴らしい出会いをコーディネートできる人との繋がりを大切にする教員を目指します。また、今の私なら、英語を勉強することを伝えるのに説得力があるかもしれません。言葉が通じなくても、コミュニケーションはとれる。けれど、やはり通じた方がもっと楽しかっただろうから。今、外国語教育が Hot な話題ですが、児童には言葉を通して、コミュニケーション力や対話の作法を学ばせたい。素敵な出会いをチャンスにしてほしいので。

グアムの家族とダンスをする特論の受講生。動きのしなやかさに圧倒される。

ザビエル高校にあった壁画。どんな思いでこの壁画を制作したのだろうか？

鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「島々が育むウミガメたち―研究と保全の最前線から―」

平成 28 年 10 月 29 日（土）に鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「島々が育むウミガメたち―研究と保全の最前線から―」を鹿児島大学郡元キャンパスにおいて開催いたしました。当日は多数の皆様方に御参加いただき、盛会となりました。

趣旨

その名の通り、海に暮らす亀であるウミガメ。周りを海に囲まれる島国のわが国では、ウミガメはおとぎ話にも登場するように、古くから人々にとって馴染み深い存在である。また、世界各地の、特に食料の乏しい島嶼部では肉や卵が重要なタンパク質として利用されてきた背景もあり、過去には乱獲が行われた歴史もある。それに加え、彼らの産卵地である砂浜海岸の人為的原因による汚染や消失も影響し、ウミガメ類が絶滅の危機に瀕した時代もあった。現在は世界的にウミガメ保護への機運が高まり、様々な方面からの保全の道が模索されている。わが国周辺の海には、アカウミガメ、アオウミガメそしてタイマイの 3 種が多く見られ、島嶼部、特に鹿児島県から南へ伸びる南西諸島の砂浜海岸は、これら 3 種の大切な産卵場として知られる。本シンポジウムでは、わが国の海に暮らすウミガメ類について、様々な異なる角度からのアプローチを続ける 3 名を演者に招き、島嶼部を中心としたウミガメ研究と世界的スケールでの取り組みの概要、生態研究の最先端、保全のための地域規模での取り組み等についてご紹介いただき、わが国のそして鹿児島が誇るべき大きな宝であるウミガメ類について、理解を深める機会としたい。

松沢慶将先生

1）ウミガメ類の生態と保全の概要

松沢慶将
（日本ウミガメ協議会・神戸市立須磨海浜水族園）

ウミガメは海に進出したカメの総称で、現存種はオサガメ科 1 属 1 種とウミガメ科 5 属 7 種に分けられ、世界中の熱帯から温帯の沿岸から外洋まで広く生息する。いずれの種も、鰭状の四肢、薄く滑らかな甲羅、塩類腺などを獲得して海での生活に適応した一方で、卵胎生ではないため、産卵の時だけは砂浜に上陸しなければならない。日本では、アカウミガメが福島県以南の主に太平洋側で、アオウミガメが小笠原諸島と南西諸島で、タイマイが琉球諸島でそれぞれ産卵するほか、オサガメが奄美大島で偶発的に産卵した記録がある。海と陸を行き来するウミガメと人間の関係は多様で、涙を流しながら産卵する様は見る者の同情を誘うが、他方、特に島嶼部では、肉や卵が伝統的に利用されてきた。大航海時代以降の乱獲に加え、20 世紀後半には、漁業による混獲、産卵地の侵食、海岸の開発、原油流出なども起因して、多くの種や個体群が絶滅の危機に瀕した。1970 年代以降は世界的に自然保護の機運が高まり、様々な対策がとられ、成果が確認されているものもあるが、その後の研究により逆効果であったと判明したものも少なくない。生活史を通じて大規模かつ複雑な回遊をすることや、1 世代が 40 年にも及ぶことなど、その生態的特異性ゆえに、ウミガメ類の包括的かつ効果的な保全には、長

期的な産卵モニタリングをはじめとする地域ごとの取り組み、生息地の住民による理解と、国際的な連携が不可欠となっている。

2）ウミガメにとっての南西諸島

石原　孝
（神戸市立須磨海浜水族園）

南西諸島のウミガメの特徴は様々あるが、まずは国内で産卵するアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの 3 種全てが恒常的・同所的に産卵する点が挙げられる。アオウミガメは大隅諸島、タイマイは奄美群島を産卵の北限とし、アカウミガメの産卵は八重山諸島が南限のため、3 種の産卵域が南西諸島で重なる。次に、奄美群島以南で産卵するアカウミガメは九州以北の日本本土とは遺伝的な集団組成が異なることが最近明らかになった。象徴的なのは南太平洋オーストラリアの個体群に特有とされていた遺伝子型が琉球列島の集団の 20～40%を占め、南に行くほどその割合が高い傾向を示した点である。このことから、琉球列島を通して南北太平洋の個体群間で遺伝的な交流があるか、あったことが伺える。アオウミガメやタイマイに関しては、ごく稀にだが甲長 20cm 程度の幼体が南西諸島で見つかることがある。このサイズはロストイヤーと呼ばれる生息場所がどこにあるのか未だに不明な時期であり、今後の解明が待ち望まれる。また、近年アオウミガメやタイマイをスキューバダイビングで見かける頻度や頭数が増えているようだ。食用や剥製用に捕獲されることもなくなってきたので、人を恐れない個体が増えてきたからだとも、そもそも個体数が増えてきたからだとも言われている。今は水中写真も簡単に撮れるようになってきており、ダイビング中の写真を通して、南西諸島の海を舞台に、ウミガメの様々な生態が今後明らかになっていくことが期待される。

3）奄美大島におけるウミガメ類の保全活動

興　克樹
（奄美海洋生物研究会）

大小の砂浜が散在する奄美大島においてウミガメ類の産卵する砂浜は 130 浜以上あるが、行政による調査が実施されているのは、奄美市の一部および龍郷町全域の約 30 浜で、残りの未調査浜約 100 浜を地域住民や関係団体と分担して、2012 年から当研究会が主体となり実施している。2012 年の奄美大島全域におけるウミガメ類の産卵回数は 1081 回（アカウミガメ 605 回、アオウミガメ 327 回、種不明 149 回）で、初めて奄美大島全域の産卵状況が明らかとなった。また、奄美群島においては、2013 年から徳之島での調査が実施され、奄美大島、喜界島、沖永良部島、与論島を含めた奄美群島全域では、産卵 1932 回（アカウミガメ産卵 1141 回、アオウミガメ産卵 662 回、種不明産卵 129 回）という結果が得られ、2013 年には日本全国の産卵回数の約 1 割を奄美群島が占めていた事が明らかとなった。

奄美大島では、2012 年以降、ウミガメ産卵

石原　孝先生

興　克樹先生

回数が減少しており、アカウミガメの産卵回数の減少、アオウミガメの産卵回数の増加する傾向がみられる。2015 年には、雌産卵個体の衛星追跡調査が行なわれ、アカウミガメは東シナ海を摂餌海域としていること、アオウミガメは九州や本州、伊豆諸島を摂餌海域としていることが明らかとなった。また、奄美大島では、在来種であるリュウキュウイノシシによるウミガメ卵の捕食が確認されており、2015 年は総産卵巣数の約 25%にあたる 89 巣が捕食され、鹿児島県による保全対策が進められている。

当研究会では、ウミガメと産卵する砂浜の保全を目的に、ウミガメミーティングという講話会や観察会を定期的に開催している。

討論風景

鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「奄美・沖縄諸島先史学の最前線」

平成 29 年 1 月 22 日（日）に鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「奄美・沖縄諸島先史学の最前線」を奄美市 AiAi ひろばにおいて、奄美市・奄美群島広域事務組合との共催で開催いたしました。当日は多数の皆様方に御参加いただき、盛会となりました。

趣旨

先史時代とは文字のない時代を指します。文字がない時代ですから、この時代を理解するためには考古学的アプローチや人類学的アプローチが主になります。この 20 年ほど奄美・沖縄諸島ではより詳細な分析方法や新しい分析方法が導入され、先史時代の様相がかなり理解されてきています。このシンポジウムでは、その一部を奄美の皆様に還元したく企画されました。

テーマは以下の 6 本です。①近年の研究で大変盛んな研究が DNA（ミトコンドリア）分析で、人間集団がどこから来たのかがかなりわかるようになりました。この分析から奄美・沖縄諸島の人々のルーツを探ります。②奄美群島より出土した古人骨分析により、私たちの遠い祖先がどのような顔つきや体型をしていたか、そしてその変化について紹介します。③古人骨の炭素・窒素同位体分析を行うことにより、その人が生前どのような食糧を食べていたのかが理解できるのですが、この分析方法により、先史時代人の食性の復元を試みます。④遺跡から脊椎動物の骨を回収して、先史時代人がどのような脊椎動物を食べていたのかを説明します。主な食料源はイノシシだったのでしょうか。サンゴ礁の魚だったのでしょうか。⑤遺跡より貝

前田芳實学長挨拶

類を回収して、先史時代人がどのような貝類を食料として利用していたのかを解説します。トビンニャ（ティラジャー）は昔も良く食されていたようですが、他にどのような貝類を食べていたのでしょう。⑥奄美の先史時代人にとって植物食は重要な食料源でした。彼らはどのような食料を利用していたのでしょうか。いつ頃農耕が始まったのでしょうか？難しそうなテーマをわかりやすく、お話ししたいと思います。

1）DNA からみた南西諸島集団の成立

篠田謙一
（国立科学博物館人類研究部）

日本人の起源については、これまで様々な学問の分野で研究が行われているのにもかかわらず、その意見は一致してない。その中で、DNA を用いた研究は、ヒトの遺伝的な系統を過去から現在まで正確に追求することができるために、近年非常に重要な学問分野となっている。

南西諸島は、日本列島の南西部に位置しており、その地理的な位置から台湾や東南アジアから日本列島にヒトが侵入するルートに相当する。その南西諸島内では、考古学的な調査によって貝塚時代から近世にかけての遺跡が発掘されており、人骨も発見されている。

奄美を含む南西諸島では、12 世紀頃までに生活のスタイルがそれまでの狩猟採集から農耕へと変化する。狩猟採集生活をしていた古代の人々と農耕をもたらした人々の関係については、特に興味が持たれるが、その実態についてはほとんど分かっていない。その中で人骨の DNA 分析は、それを解決する最も有効な方法であると考えられる。今回、我々は南西諸島の集団の遺伝的な特徴を知る目的で、この地域の新石器から近世に至る様々な遺跡から出土した人骨の DNA 分析を行った。

篠田謙一先生

その結果、南西諸島における古代から近世にかけての遺伝的な連続性を確認することができた。しかしながら、解析した個体はそれ程数が多くはなく、結論は限定的である。そのためより正確な結論を得るためには、今後、さらに多くの個体の分析を続けていく必要がある。

2）奄美諸島から出土した古人骨

竹中正巳
（鹿児島女子短期大学生活科学科）

奄美諸島では、近年、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島で埋葬遺跡や古墓の発掘や調査が行われ、縄文時代から近世にかけての古人骨の出土が相次いでいる。特に喜界島では、この十数年の間に、城久遺跡群、手久津久遺跡群、長石の辻遺跡から中世人骨が多数出土している。中でも、手久津久遺跡群からの出土数は 300 体を超える。奄美大島でも、屋鈍遺跡（宇検村）から中世人骨が、徳之島では下原洞穴遺跡（天城町）から縄文人骨、面縄貝塚（伊仙町）からは縄文・中世・近世人骨が、トマチン遺跡（伊仙町）からは縄文人骨が出土している。沖永良部島では和泊、知名の両町内の古墓の調査が行われ中・近世期と考えられる古人骨の調査が行われた。加えて、大山水鏡洞遺跡（知名町）から貝塚人骨が鳳雛洞遺跡（知名町）から中世人骨が出土している。

今回のシンポジウムでは、近年の奄美諸島から出土した古人骨を紹介し、各時代の奄美の人々の顔つきや体つき、埋葬風習について若干の考察を行った結果を報告する。

3）骨の化学分析からみた南西諸島の人々の食生活

米田　穣[1]・覚張隆史[2]
（[1]東京大学総合研究博物館、
[2]金沢大学国際文化資源学研究センター）

日本列島で一番南に位置する南西諸島は、日本列島における人類の歴史を理解する上で非常に重要である。第一に現在の温暖な環境になる以前の更新世と呼ばれる1万2千年よりも古い時代の人骨が沖縄島や石垣島、宮古島で発見されている。本州では浜北根堅遺跡の1か所から発見されているだけなので、ヒトの直接的な証拠として極めて重要だ。資源の限られた島の環境で、野生の動植物を利用してどのように生活してきたのだろうか？また、日本列島と中国や台湾、朝鮮半島がどのように交流してきたのかを理解する上で、古代から歴史時代の南西諸島は極めて重要な地域でもある。例えば、近年の発掘調査によって喜界町の城久遺跡群・崩り遺跡では、大陸産の陶磁器や製鉄遺構などが発見され、比較的小さな喜界島に地域の中心となるような、先進な技術をもった政治的に重要な拠点が存在したことが明らかになった。実はこれらの遺跡からは、いくつかの人骨も発見されており、当時の人々の姿や生活を我々に知らせてくれる。我々は、古人骨に残存する炭素・窒素同位体比から喜界島にくらした古代・中世の人々の食物を推定したところ、時代によって食生活は変化する興味深い結果が得られた。喜界島に暮らした人々では時代とともにアワなどの雑穀が重要になっていた。中央や大陸との結びつきがあった喜界島は特別な食生活だったのか、遺跡との比較で考察する。

4）奄美の遺跡から出土する貝

黒住耐二
（千葉県立中央博物館）

約1万年前からの奄美・沖縄の先史時代は貝塚時代と呼ばれ、サンゴ礁での漁撈―採集社会が続いており、サンゴ礁の厚質の貝類を様々な製品や交易品として利用していた。奄美の遺跡から出土する食用の貝類では、マガキガイ・ヤコウガイ・シャコガイ類などの現在も好まれている種が主体で、味覚は数千年間、変わらなかったとも言える。

超大形のサザエ、ヤコウガイは奄美の遺跡に特徴的な貝の一つである。6～9 世紀には、奄美大島の遺跡から本種が大量に出土し、螺鈿の原材料として貝殻が他地域（ヤマト≒日本本土と中国という2説）へ運ばれたヤコウガイ交易が想定されている。この交易が 10～12 世紀頃まで続くという考えもあるが、私は、この時期に本種が極めて多い遺跡が存在せず、後半の交易に関しては今後の検討が必要だと思っている。

安定した漁撈―採集社会を続けてきた奄美も平安時代末頃には、穀類農耕社会に劇的に変化した。未だ、この変革期の状況は明らかにできていない。

貝塚からは、食用ではない小さなカタツムリ

米田　穣先生

黒住耐二先生

も時に多数抽出できる。カタツムリは、その移動性が極めて小さく、島ごとに固有種となり、また環境の変化に敏感な動物でもある。現在は島中央部の原生林にのみ生息するエラブマイマイが沖永良部島の海岸部の住吉貝塚から多数出土した例や同島の鳳雛洞では島から絶滅した種も確認している。遺跡出土のカタツムリから人間による環境改変を考えることができるのである。

5）遺跡出土脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の動物資源利用

樋泉岳二
（早稲田大学教育学部）

奄美・沖縄諸島の遺跡からは多くの脊椎動物（魚類や鳥獣類など）の骨が出土する。これらの資料を分析した結果、①7500 年前～5000 年前ころ（貝塚時代前 1～前 2 期）、②5000 年前～10 世紀ころ（貝塚時代前 3 期～後期）、③グスク時代～近世の 3 つの時代によって、動物資源利用の様相が明確に変化することが明らかになってきた。貝塚時代前 1～前 2 期はイノシシ狩猟が中心だが、6000 年前ころから魚が急増する。その原因は明らかでないが、サンゴ礁の形成や九州縄文文化の影響が関わっている可能性がある。貝塚時代前 3 期～後期は、サンゴ礁域での漁労とイノシシ猟を中心とした様相が 3000～4000 年間にわたって継続する。島という限られた環境の中で人と自然との共生関係が非常に長期間にわたって続いたこと、この驚くべき持続性は世界的に見ても特筆されるものである。グスク時代（11 世紀以降）には本格的な農耕の開始に伴って、農作業の役畜として重要なウシをはじめとして、ウマ、ブタなどの飼育動物が急増する。沖縄諸島では森林性のリュウキュウヤマガメが激減することから森林伐採が進んだことが示唆される。漁労は衰退し、長らく続いてきたサンゴ礁との結びつきが急速に弱まる。このように、グスク時代における農耕の普及は人と自然の関係性の全体的・複合的な変化をもたらしたものと考えられる。

6）奄美・沖縄諸島先史時代人の植物資源利用

高宮広土
（鹿児島大学国際島嶼教育センター）

「奄美・沖縄諸島のような南方地域で活躍する狩猟採集民にとっては、植物食は生存するためには不可欠な食資源である」と学生の頃に学んだ記憶がある。その頃、先史時代における植物食利用はほとんど理解されていなかった。そこで、この方面で研究を実施しようと考え、重鎮に相談したことがあった。すると彼から「この地域では先史時代の植物食利用を知る手がかりとなる植物遺体（種子など）を回収することは大変困難だよ」というアドバイスを頂いた。

20 数年前、植物遺体を回収するためにフローテーションという装置をこの地域に導入し、遺跡から土壌をサンプルし、その中から植物遺

樋泉岳二先生

高宮広土先生

体の検出を試みた。重鎮の方のおっしゃった通り、目的とするものは土壌サンプルを多量にフローテーション処理したにもかかわらず、とても少ない量だった。しかし、その検出された少量の植物遺体から、先史時代の植物食利用が見え始めてきている。

そのうちとても重要な点が二点判明しつつある。一つは先史時代に実際に狩猟採集民が存在していたことである。世界的にみると奄美・沖縄諸島のような島で狩猟採集民が存在した島は他にない可能性がある。二点目は狩猟採集の時代から農耕への変遷の時期が明らかになりつつあることである。奄美諸島では 8 世紀から 12 世紀で、沖縄諸島では 9 世紀から 12 世紀あたりと考えられる。二点目は農耕への変遷は奄美諸島でまず起こり、それから南下したことを示している。

討論風景（AiAi ひろば）

国際ワークショップ「Future Collaboration on Island Studies between Pattimura University and Kagoshima University」

平成 28 年 10 月 17〜19 日に国際ワークショップ「Future Collaboration on Island Studies between Pattimura University and Kagoshima University」を国際島嶼教育研究センターにおいて開催いたしました。

1) How Did Prehistoric People Impact the Island Environments of Amami and Okinawa, Japan?（高宮広土・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

2) The Occurrence of Landslides due to Earthquakes. Real Time Data and Reality Analysis Case Study of Ambon Island (Rafael M. OSOK and Ferad PUTURUHU・パティムラ大学)

3) Development of Marketing of Fisheries Products in Maluku（Yolanda M. T. N. APITULEY and Dionisius BAWOLE・パティムラ大学)

4) Improvement of the Marine Products

記念撮影

発表風景

Distribution for the Purpose of the Promotion of the Remote Island Fishery: A Case Study in Nakanoshima Island（鳥居享司・鹿児島大学水産学部)

5) The Diversity of Grouper (Ephinepelinae) in Ambon Island, Maluku, Indonesia（Gino V. LIMMON and Frederik RIJOLY・パティムラ大学)

6) Exploring the Diversity of Hexacoral on Shallow Water of the Amami Islands（藤井琢磨・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

7) Identification and Inventory of Coastal and Small Islands Conservation Area in Lease Islands, Maluku Province（James ABRAHAMSZ, Frederik W. AYAL, Yoisye LOPULALAN and Marvin M. MAKAILIPESSY・パティムラ大学)

8) Effects of Tourism on the Physiological Stress Levels and Behavior in Amami Rabbits（鈴木真理子[1]、藤田志歩[2]、井上英治[3]、伊藤圭子[4]・[1]鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、[2]鹿児島大学共同獣医学部、[3]東邦大学理学部、[4]奄美動物病院）

9) Cassava and Sweet Potato in Western Ceram, Maluku Province: Diversity, Cultivation and Utilization（Simon H. T. RAHARJO[1], H. HETHARIE[1], G. H. AUGUSTYN[1] and M. PESIRERON[2]・[1]パティムラ大学、[2]BPTP Maluku)

10) Potato Production and Distribution in the Kagoshima Island Areas（坂井教郎.・鹿児島大学農学部)

11) Productivity of Nutmeg (*Myristica* sp.) in Agroforestry System (“Dusung”) in Ambon Island（J. Audrey LEATEMIA, Herman REHATTA, M.R. ULUPUTTY and Asri MAHULETE・パティムラ大学)

12) A Newly Invasive Long-Horned Beetle from Mainland Kyushu Attacks Citrus Trees in the Amami Islands（坂巻祥孝・鹿児島大学農学部)

13) Exploration of Local Microbes as Sources of Thermostable Biomass-Degrading Enzymes（Dominggus MALLE・パティムラ大学)

14) Design and Application of Unsinkable Tuna Longboat for Local Fishermen（Wolter R. HETHARIA and Obed METEKOHY・パティムラ大学)

15) Renewable Energy and Lifestyle Change: An Example of Yakushima Island’s “Zero Emissions” Initiative（市川英孝・鹿児島大学法文学部)

河合センター長と Dr. Rafael M. OSOK

エクスカーションで唐湊果樹園を訪問

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 172 回　　2016 年 9 月 26 日

離島地域の漁業発展―マダガスカル島南西部の事例をふまえて―

飯田　卓
（国立民族学博物館）

漁業先進国の日本において、沿岸漁業の技術革新のほとんどは、漁業協同組合と研究者、漁具メーカー三者の連携によっておこなわれている。しかし離島部や島嶼国家では、こうした産業的なイノベーションは期待できないか、あるいは、移植されるまでに時間がかかる。この問題を解決するためには、個々の漁業者の能力の範囲内でイノベーションが達成できればよいのだが、マダガスカル島沿岸部ではそうした事例がたて続けに観察された。

本発表では、その事例を紹介して個人的イノベーションが生ずる条件を特定する。とりあげる事例は、①1998 年頃に普及した木製銛銃、②2003 年頃に普及した木製イカ疑似針、③導入時期は不明だが 2008 年頃に目撃されたゴムタイヤ製地曳網、④2008 年頃に普及した電灯潜り漁の装備である。いずれの事例も、新奇な近代的素材を旧来の素材や漁撈技術と組みあわせて実用化されたもので、ブリコラージュ（ありあわせの素材を活用した工作）の日常化と着想の公共化がその背景にあるといえる。

なお、マダガスカル島は世界で 4 番目に大きな島なので、島嶼国家と呼ぶには語弊があるが、公共交通が発達しておらず漁業部門と製造業部門との結びつきが未熟であるため、今回の発表に関するかぎりは、疑似的な小島嶼的環境にあると表現することができる。

第 173 回　　2016 年 11 月 14 日

少子高齢化を見据えた地域医療実習

大脇哲洋
（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

少子高齢化の日本は、これまで世界中で経験したことのない、人口減少社会へと突入している。確実に減る人口を前に、地方はどのような社会を構築し、維持していくのか？正解の見えない政策を展開しなければならない。それでは医療はどうなるのか。2025 年に団塊の世代が後期高齢者となり、死亡数が増加する。老年医療が医療の主体となり、2040 年頃には日本全体の医療はピークを迎える。その後、急激に変化し、縮小する医療環境に対応するために、医育機関としてどのような教育が必要で、どのような実習が求められるのかを考察する。

その上で、現在我々が行っている、医学科 6 年生全員への「離島・地域医療実習」、希望する全国の医学生に提供している「全国医学生夏

飯田　卓先生

大脇哲洋先生

期離島実習」、桜ヶ丘の医療系学生に提供している「地域医療トレーニングキャンプ in 北山」や「地域医療トレーニングキャンプ in さつま町」、地域枠医学生に必修としている「地域枠医学生離島実習」などを紹介する。

第 174 回　2016 年 12 月 12 日

甑島列島に分布する上部白亜系姫浦層群の地質と産出化石

三宅優佳
（薩摩川内市教育委員会）

九州の南西部には、上部白亜系の姫浦層群が広く分布しており、甑島列島でも非海生～海生の化石が多く見つかる。下甑島北部の姫浦層群では、下部～中部カンパニアン階の河川成堆積物や潮汐堆積物、波浪堆積物を伴う外浜や陸棚などの浅海相が繰り返しており、非海成層からはマガキ類のカキ礁や脊椎動物化石が産出し、外浜や陸棚堆積物には二枚貝やアンモナイトなどの大型化石や放散虫などの微化石が含まれている。中甑島の姫浦層群は、主に中部～上部カンパニアン階からなり、浅海相を伴うものの土石流堆積物やスランプ層が特徴的な陸棚斜面相が主体で、半遠洋性の泥岩からイノセラムスや放散虫などが産出する。また、土石流堆積物には、マガキ類の破片殻が含まれており、陸域から運搬されてきたと考えられる脊椎動物の骨片を伴う。

本発表では、甑島列島の地質に加えて、産出する化石について紹介する。また、イノセラムスやアンモナイトなどの化石を用いて明らかになった下部～中部カンパニアン階の層序や動物相にも注目する。

第 175 回　2017 年 2 月 13 日

パプアニューギニアにおける犯罪の現状と課題―日本の事例と比較して―

Gary SALI
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

本発表では、パプアニューギニアにおける犯罪の現状だけではなく、犯罪が起きる背景について、日本の犯罪および司法制度と比較しながら明らかにしたい。様々な媒体から得られる文献資料や事例を用いて、知能犯罪や越境犯罪、民族紛争、窃盗犯罪、暴力犯罪の観点から、パプアニューギニアの犯罪の現状を紹介する。犯罪は孤立・分断した問題ではなく、パプアニューギニア人や日本人が日々の生活を営んでいる社会的文脈に由来している。多くの先進国や発展途上国と比較しても、日本は低い犯罪率を維持してきた。パプアニューギニアは、日本の刑事司法制度だけではなく、日本の低い犯罪率に関係している構造要因を学ぶ必要がある。パプアニューギニアは危機駆動型アプローチから脱却し、様々な構造要因が混ざり合って犯罪が成立していることを理解すべきである。パプアニューギニアの最悪な犯罪情勢に対応するためには、政治的意志・資源だけではなく、強く、活気があり、安定的で、弾力的な官僚制度・司法制度が必要となる。

三宅優佳 先生

奄美会場とネットでつないで討論

お知らせ

（1）着任

外国人客員准教授としてパプアニューギニア工科大学の Gary SALI 氏が 11 月 1 日に着任いたしました。研究テーマは「パプアニューギニアにおける犯罪に関する興味をそそる問題」、専門は「社会学」で、2017 年 3 月 24 日まで滞在予定です。

大学院生に講義をおこなう Gary SALI 氏

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.37, No.2, 2017

Research Papers

CALINAWAN A., PAULE H. B. S., ADARNA L., VILLEGAS L. M. G. and MENDOZA C. S.: Pyrethroid Pesticides of Cabbage-Grown Area in Dalaguete, Cebu, Philippine

HAYWARD P. and KONISHI J.: A Fleeting Aquapelago: A Theoretical Consideration of The Japanese Presence in The Torres Strait 1880S–1940S

～フィールドこぼれ話～

「島と看護職」

兒玉慎平（医学部保健学科）

私が鹿児島大学の看護学専攻に赴任したのは、2003 年の 4 月のことです。4 月も半ばが過ぎ、ようやく鹿児島での新生活に慣れたある日、上司の H 教授が言いました。「ちょっと、出張に行ってくれないか。」告げられた出張先は与路島でした。

初めて行った与路島の印象は忘れられません。当時 100 人余りだった島民すべてがひとつの集落で生活する離れ小島。へき地診療所はあるものの、常駐しているのは看護師ひとり。地域社会と言えば、それまで生活していた関東地方の都市部しか見たことのなかった私にはまさに衝撃でした。

以来 14 年間、毎年何回となく島を訪れます。主に奄美大島を中心に実習・研究と用務はさまざまですが、いつも印象に残るのは、そこで地域に貢献されている方々の姿です。取り組み方は人それぞれにせよ、皆さんがその地域の人々やつながり、活動や資源について成り立ちまでよく知っており、それらをうまくやりくりする中で、どんなことでも自分たちで何とかしようとされていました。そして看護職の方々にも、同様の態度で、それも自然に、患者さんや地域の人々に関わっている方がたくさんいらっしゃいました。最初は何とも思っていなかったのですが、だんだんと不思議に感じるようになりました。

看護の世界でよく使われる言葉に、「全人的」というものがあります。曰く、病気を診るのではなく患者を看るのである、対象を生活の主体として包括的に見るのである、地域で健康に生きることを援助するのである、などなど。特に、対象を捉えるときに、とりまく環境、家族や地域社会との関わりをその視点に内包することが大切とされます。しかし、それを現実に体得するのはとても難しい。私もなんとなく、看護職の最終到達点のようなものである、と思っていました。それが小さな島嶼では、自然に体得している方がたくさんいらっしゃるように感じる。これは何だろう？

答えはまだ見つかっていませんが、ひとつの理由として、与路島にも見られたような島嶼の狭小性と資源の稀少性があるような気がしています。狭いけれどもその中である意味完結しているひとつの世界。さらにその世界の中で、圧倒的に足りない資源をやりくりして対応しなければならない看護職。ひとつひとつは不利な環境なのですが、このシマという自分の認識の中に納まる手ごろな大きさの地域社会が、対象を「全人的」に捉え、その対象が地域でよりよく生きていくためのさまざまな援助を行う看護職の能力を養っているとすれば面白いのではないか。こんなことを考えながら今年も島に関わっています。

「とうがらしに旅して」

第十四回　「花岡胡椒（一）」

南日本新聞の 2015 年 6 月 2 日付 12 面に掲載された「花岡の唐辛子復活へ」という記事を読んで驚いた。鹿児島県にこんな面白い唐辛子があったなんて。唐辛子研究者と自称しながら、知らなかったことがとても恥ずかしい・・・。灯台下暗し。『鹿屋史』や『花岡郷土史』にもそれぞれ「花岡こしょう」、「花岡コショウ」という項目がある。資料によると、明治 31 年（1898 年）に当時の村長が神戸（横浜説もあり）の貿易商から教えられて種子を持ち帰ったのが始まりとされている。大正時代には作付面積が 120 町、耕作農家が 1,200 戸となり、全国生産量の 70% にも及ぶようになった。しかし、昭和恐慌による価格の下落や太平洋戦争の影響で、自家用以外にほとんど生産されなくなったとのこと。南日本新聞には「このような歴史を知った飲食店経営近藤善光さん（39）が、鹿屋青年会議所の会員ら約 10 人で 4 月に研究会をつくった」とある。早速調べてみると、「花岡胡椒研究会」なるものが存在するではないか！ぜひお話を伺いたいと思っていたところ、2016 年 10 月にその機会を得た。唐辛子研究仲間とともに鹿屋市の花岡地区公民館へ行くと、花岡胡椒研究会の近藤善光会長や会員の皆様が暖かく迎えてくださった。その場におられた 67 歳の男性から興味深いお話を聞くことができた。「昔はコショウチギリヤスミ（注：『花岡郷土史』には「コシュチギイヤスン」とある）という学休日があった、お弁当を持って朝から夕方まで唐辛子の果実を摘んだ、一升で 8 円～10 円、一人 6 升くらい摘めた、そのお金を学校に寄付し、プールを作った」、「子供は片手で摘むが、おばちゃんたちは両手で摘んでいた、果実のみを摘む（花岡胡椒（二）を参照）」、「収穫後は手が辛かった、近くの田んぼの水路で手を洗った、洗わないでおしっこをするとあそこが痛かった」、「小学生の頃、友達の箸に唐辛子を塗って、いたずらをしたこともあった」。どんどんと思い出話が出てきて、楽しくて仕方がない。ただ、『鹿屋史』には「花岡こしょうは「たかの爪」といわれる、二、三センチの小粒で」とあるのだが、お話を伺っていると、どうも違う。そこで、近藤会長のご好意で、花岡胡椒を栽培している宮迫治時さんのお宅を訪問することにした。（花岡胡椒（二）へ続く）（山本宗立）

編集後記

夏にミクロネシア連邦のポンペイで、ナン・マドール遺跡にいきました。ナン・マドール遺跡は 2016 年 7 月にユネスコ世界遺産及び危機遺産に登録されたのですが、良くも悪くも 2 年前に行った時と全く変わりませんでした。今後どのように保全・保護されるのかが注目です。（大塚　靖）

島嶼研だより　No. 73　平成 29 年 3 月 15 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
Website　http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html